



日本学研究

— 北京日本学研究中心 —

第十五期

學苑出版社



—北京日本学研究中心—

日本学研究

第十五期

學苑出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本学研究 (第 15 期) / 北京日本学研究中心编. - 北京: 学苑出版社,
2005.10

ISBN 7-80060-327-x

I. 日… II. 北… III. 日本-研究-文集-日文 IV. K313.07-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2005) 第 109786 号

出版发行: 学苑出版社

社 址: 北京市丰台区南方庄 2 号院 1 号楼 100079

网 址: www.book001.com

电子信箱: xueyuan@public.bta.net.cn

邮购电话: 010-67674055

销售电话: 010-67675512、67602949、67678944

印 刷 厂: 北京白帆印务有限公司

开本印张: 787×1092 16 开本 23.5 印张

字 数: 540 千字

版 次: 2005 年 10 月北京第 1 版

印 次: 2005 年 10 月北京第 1 次印刷

印 数: 0001—2000 册

定 价: 40.00 元

主 编 徐一平 白井启介

编委会委员 郭连友 曹大峰 譙燕 秦刚
宋金文 加藤晴子

执行主编 郭连友 张彦丽

目 次

北京日本学研究中心『万叶集』2004 年国际研讨会特集

後期遣唐使と東アジア文学空間の誕生——山上憶良の位置	竹内信夫	1
万葉集と古代東アジア	崔光準	12
額田王と中国文学		
——万葉時代における東アジア交流の一例として——	呂 莉	26

日本語と日本語教育

現代短歌・俳句に見る新語オノマトペ		
——なぜ日本語母語話者には理解可能なのか	大野純子	38
畳語名詞の意味	譙 燕	50
日常生活における詫び行為に関する日中韓対照研究—受け手調査		
より得られた言語表現についての評価を中心に——	崔信淑	60
インプット重視の教授法が日本語習得に果たす役割	王文贤	73
日中両言語における造語要素「超～」についての考察	费建华	88
蔡元培の日本語翻訳と初期の哲学用語の移入	朱京伟	101
中国におけるシソーラスの研究と		
中韓日並行シソーラスの開発について	施建军 徐一平	114

日本文学

竹添光鸿《诗经》训诂学蠡探		
——《毛诗会笺》破《诗集传》之综合检讨	顾 涛	126
時代と文学への新たな眼差し——多喜二研究近年の転回から	島村輝	139
無縁・公界と「伊豆の踊子」		
——もうひとつの日本文化像	王小林	146

日本社会

关于日本国民年金制度建立初期存在的问题与争论的历史回顾	宋金文	157
-----------------------------	-----	-----

日本の经济体制与平等社会的构筑——高速经济成长时期——	丁红卫	171
香港における日本の大衆文化の文化的影響——日本のポップミュージックとヤオハンに関するケーススタディ	王向华 许志豪	182

日本文化

本居宣长花甲年自赞歌中 ——“大和心”和“山樱”的含义及其变化	胡 稹	198
幸徳秋水の中国認識	张 杰	209
内藤湖南の文化史への視座	朱 琳	221
近代中日女性教育論比較研究	何 玮	237

修士卒業生優秀論文

心理文に関する一考察——日中対照の観点から	李 珍	252
『蜻蛉日記』における夢	陈 燕	278
ニューカマー中国人就職者の教育戦略	林 艳	298
旧制一高における新渡戸稲造の教育実践の考察 ——エリート教育の視点から	韩立冬	325

书 评

訳林出版社『万葉集』中国訳本の翻訳を評す	刘德润	356
----------------------	-----	-----

後期遣唐使と東アジア文学空間の誕生

—— 山上憶良の位置¹

日本東京大学大学院総合文化研究科 竹内信夫

皆さん、こんにちは。東京大学の竹内です。現在は、この北京日本学研究中心の日本側主任教授として、センターの教育・研究を今後発展させてゆくにはどうすればよいかということについて、センターの中国側スタッフといっしょに考えております。特にセンターの教育・研究を、激動を続ける中国社会とどのように結びつけてゆくかということが大きな課題になっています。センターのすべてのスタッフが考え、また望んでいることは、センターの日本研究をセンターのなかだけで、あるいは中国のなかだけで完結させるのではなく、東アジアという広い世界に向けて開き、そのなかでセンターが名誉ある地位を得るようにしたいということです。

本日のシンポジウムのパネルには、そういうセンターの意思を反映して、中国、韓国、日本の研究者が一人ずつですが座っており、それぞれの立場から日本研究の成果と展望について話をするということになっております。一般的な話ではなく、具体的な共通のテーマについて話をしようということで、シンポジウムのテーマも東アジアということ意識して設定されているようです。

今回のシンポジウムのテーマは「万葉時代の東アジアの交流」となっておりますが、私は『万葉集』の専門の研究者ではありません。呂先生、崔先生のように、非常に専門的な立場で『万葉集』を研究している者ではありません。私の専門の研究領域は近代のフランス詩です。それと同時に、遣唐使時代の東アジア比較文化も研究しております。特に、空海、円仁という最後期の遣唐使に随行して中国にわたり、そこで密教というものを学んで帰国し、日本の文化史に大きな足跡と影響を残すことになる人物を中心に研究しております。近代のヨーロッパ、遣唐使時代の中国、この双方と日本との文化交流史を専門にしている立場から、「東アジア」という地域の歴史的成立と将来の可能性を考えるというのが、現在の私のもっとも大きな関心事になっています。

おそらく私が、今日ここで皆様に話をするというのは、そのことを考えていただいた結果ではないかと思えます。『万葉集』のなかに分け入って専門的に研究をしているわけではありませんが、『万葉集』というものが成立してくる時代のことについては、私にも常々考えていることがありますので、今日はそのことを皆様方にお話して、御意見や御批判を頂きたいと考えております。

さて、本日のテーマに掲げられている「万葉時代」というのは、いつの時代のことを言うのでしょうか？ もちろん、それが『万葉集』と関係付けられる時代である、ということはわかるのですが、それでは『万葉集』のどのような側面に関係付けられて「万葉時代」と言っているのかとなりますと、考え方は人によってかなり大きく違ってくるように思われます。『万葉集』に収められた歌の制作年代をすべて含む時代ということになりますと、雄略天皇までは広げなくとも、少なくとも7世紀始めから8世紀の終わり近くまでの200年近い期間が「万葉時代」ということになります。

私としては、その最大限の幅をもって「万葉時代」と呼ぶことに反対するものではないのですが、その背後にある大きな歴史の流れを考えますと、7世紀と8世紀を一括りにして日本や東アジアを同日に論じることは難しいと考えています。といいますのは、私の目から見ますと、7世紀の東アジアは戦争の世紀であり、8世紀は東アジア世界が安定した秩序の中で共存した平和の時代だからです。詳しいことは省略しますが、朝鮮半島を舞台に新しく台頭する東アジアの諸国、諸民族がはげしく戦った7世紀の経験から8世紀の東アジア世界が誕生したということが、私がこの時代の東アジアを考えるときの基本認識であるということは予め申し上げておきたいと思います。

それに応じて、「遣唐使」と同じ言葉で呼ばれる、日本から中国の唐王朝に派遣された使節団の性格も大きく変わります。その変化を一言で言えば、7世紀の遣唐使ははさまざまな外交問題（そのなかには戦争とその戦後処理なども含まれますが）を解決するための外交使節団であったのに対して、8世紀はその後に生まれた安定した国際秩序のなかでの文化使節団であったということです。勿論、7世紀の遣唐使に文化的任務がなかったわけでもなく、8世紀のそれに外交的任務が託されていなかったわけでもありません。

それにもかかわらず、7世紀と8世紀の東アジア世界の先に申し上げた歴史環境の違いはやはり厳然として存在していました。朝鮮半島と中国東北部において、新羅と渤海という二つの国家が成立し、唐王朝が中国大陆において安定した政治秩序を確立し、日本においては律令を基盤とした新秩序（古代天皇制）が確立するのは、7世紀の後半、私が特に注目する所謂「白村江の戦い」（663年）の終わった後のことでした。その戦争の戦後処理のために、東アジア諸国の使節団が7世紀の末には盛んに往来しますが、そのなかで、東アジアに先に述べたような安定した国際秩序が生まれてくるのです。東アジアに誕生した新しい世界システムは、唐王朝を盟主とする冊封体制の秩序と呼んでいいでしょう。この時代に派遣された遣唐使が解決しなければならない外交的問題は、この冊封体制のなかでの利害の相互調整というものにほぼ限られていました。その結果、遣唐使そのものが文化使節団の色彩を濃くするということになるります。これを私は仮に「後期遣唐使時代」と呼んでおります。

そのような視点に立って、「万葉時代」というものを先に申し上げたのよりはもう少し狭く限定して、後期遣唐使時代のなかにおいて考えてみたいというのが、本日の私の話しの前提となっています。それでは、いよいよ『万葉集』の問題に入ります。

まず最初に確認しておきたいことは、『万葉集』は、いつ、どこで編纂されたのか、という問題です。これに就いては、実は、はっきりしたことは何もわかっていないというのが実情でしょう。勿論、多くの研究者によって、さまざまな、相互に少しずつ異なった仮説が提出されてきていることは確かですが、この問題に明確な解答が得られたという状況ではありません。また、いつか決着がつくというものでもなさそうです。しかし、大筋では諸説の間に大きな隔たりはないように思われます。その大体のことだけを確認しておきますと、現在私たちが見ることのできる『万葉集』は、8世紀の始め頃に最初の2巻が編集され、8世紀前半を通じて徐々に増広されてゆき、最後に大伴家持によって集大成されたものであろうということになります。『万葉集』の編纂が遂行されたこの期間が、私の考える「万葉時代」ということになります。

『万葉集』という歌集は、いうまでもなく日本文学史に記録される最初の大規模な歌集です。『万葉集』という名称にそのことは明らかに示されています。しかし、『万葉集』という歌集が一挙に成立したわけではありません。この一大歌集に先立って、多くの歌集が存在していたことが知られています。多くの場合、それは個人の歌集だったようです。有名などころでは、柿本人麻呂や高橋虫麻呂、笠金村などの「歌集」が、『万葉集』そのもののなかで言及されております。私が今日特に取り上げてお話したい、山上憶良にも『類聚歌林』という歌集があったことが知られています。

このように個人名を持つ歌集の編纂は7世紀の終わり頃からにわかに盛んになります。日本人がウタを歌うことは、歴史時代よりもずっと以前から行なわれていたことに違いありません。『古事記』や『日本書紀』に偶々記載されたために、私たちが今でも知ることができるいわゆる「記紀歌謡」は、そのような日本人のウタの源流を指し示してくれます。しかし、そのままで古いウタの形を保っているわけではありません。『古事記』、『日本書紀』が編纂される時期、7世紀から8世紀始めにかけてのウタのありように応じて改変されていると考えるべきでしょう。その時期は、『万葉集』のもとになる「歌集」が編纂される時期と重なっています。

これらの王統譜（『古事記』）、歴史書（『日本書紀』）、歌集（『万葉集』）の編纂が相前後してほぼ同じ時代に行なわれたことは、決して偶然ではありません。詳細は省略しますが、一言で言えば、先に申し上げた新しい東アジア世界の成立というものがあって初めて可能になったものだということです。これらはすべて、その新しい世界の誕生に対応するためのものであり、そのゆえ逆に、この新しい

世界が何であり、どのようにあったかということを私たちに教えてくれるものなのです。

それを私なりに簡潔に表現するとすれば、こういうことです。つまり、『万葉集』は、8世紀に新しく生まれた東アジア文学空間の一つの表現であった、ということです。東アジア文学空間は、言うまでもなく、中国の新しい文学空間を中核とし、その刺激と誘惑によって成立するものなのですが、そこには模倣を超えた積極的な応答があったことも見逃してはなりません。このような模倣と応答の全体構造を私は「文化的擬態」という言葉で表現したことがあります。そのような「文化的擬態」は後に述べますように近代における日本文学の成立にも同じように見られるものです。

従って、『万葉集』の編纂の過程、つまりこの歌集が形をとってゆく過程には、「文化的擬態」に固有のいくつかの新しい特徴を指摘することができると思います。まず、ウタが歌い手の名前を持つということ、言い換えればウタが作家の個性とそれまでにない関係を示し始めるということですが、先に指摘したように、「人麻呂歌集」や「虫麻呂歌集」、「金村歌集」が生まれてくるのは、その必然の結果です。しかし、万葉作家の側に内発的な個性を想定し、これをその表現であると性急に考えることはできません。近代的自我の発現とは異なった機制がそこには働いていたのではないかと考えるべきではないでしょうか？

それが何であったか。この間に対して、先ほど申し上げた「文化的擬態」という考え方で説明できないだろうか、というのが私の考えです。東アジア世界への視野と展望が日本人の前に新しく開けた歴史的状況で発動された、それは、模倣と積極的応答の形ではなかったか、ということです。そのことを遣唐使の問題と絡めて、次に、少し考えてみたいと思います。

先ほども少し触れた「白村江の戦」は、現在の韓国全羅道にある「錦江」の河口で、新羅の同盟国唐の水軍と百済救援の日本水軍が正面から衝突し、日本水軍が壊滅的な敗北を喫する東アジア世界を巻き込んだ国際戦争の最後の局面でした。同時にそれは東アジアの将来を決定する重要な海戦でもありました。

その結果、唐・新羅・日本で構成されるひとつの「東アジア世界」というものが生まれました。この「東アジア世界」の構造は非常に安定したもので、少し遅れて高句麗を継承する形で渤海国がそこに加わりますが、基本的な構造はその後数百年間、いやもっと長く、蒙古の世界戦略にも耐えて近世に至るまで維持されることになります。さまざまな攪乱要因があるとはいえ、言語的配置を考えれば今後もあるいは継続される東アジアの基本構造であるかもしれません。

この新しく生まれた東アジア世界の盟主は中国の新生王朝である唐でしたが、この唐を中心とし、冊封という国際関係を律する体制によって、平和な世界秩序が生まれたことは既に話しました。この秩序を相互に確認し、新しい世界を一つに結んだのが、これらの諸国を往来した外交使節団であったことも既に申し上げ

たとおりです。戦争には捕虜がつき物です。捕虜となって中国に連れて行かれた日本人も多くいました。唐軍の捕虜もありました。そのような人々も一つの共同世界を形成する上で無視できない貢献をしました。

百済の捕虜となり日本に送られることになった唐軍の恐らくは指揮官のなかに薩弘恪という人がいました。この人は日本に来てから後、音博士にもなり、律令の編纂にも参加し、日本の朝廷からたびたび表彰されております（『日本書紀』持統天皇5年9月4日、『続日本紀』文武天皇4年6月17日条）。戦争が大規模に人間を動員するものである当然の結果として、国境を越えた人の動きを引き起こし、それが次の世代に予想外の影響をもたらす、その一つの例に数えるべき事例です。薩弘恪が大宝律令編纂に具体的にどのような貢献を為したものは不明ですが、刑部親王や藤原不比等とともに列挙された名前のなかに含まれているのですから、大いに貢献した人物の一人であったのでしょう。

「白村江の戦」で唐軍の捕虜になって、唐に抑留され、その地で長く生活し、国交回復後に日本に帰国する人も大勢いました。そういう人たちも遣唐使とは別のルートで唐の新しい文化、社会状況などに関して貴重な情報を日本にもたらしたはずで、戦争が悲惨なものであることはいまでもありませんが、その結果として大いなる人物交流、文化交流が生まれるということも無視できない事実です。

そういう風にして日本にもたらされた中国情報のなかに、長安の新しい文学状況の情報が入っていなかったとは思われません。そしてそのような情報に「日本人」が強い関心を寄せ、貪欲な好奇の眼差しを向けていたことも間違いありません。この時期の中国文学史で特記すべき点は、いわゆる「近体詩」の成立と流行です。そしてこの「近体詩」の隆盛を支えたのが有名・無名の数多くの詩人たちであり、その詩人たちの個人詩集です。現在『全唐詩』に名を連ねる詩人たちの多くは、それぞれ自作の詩を編集した詩集を持ち、それらの一部は日本にも請来されています。

どのような詩集が日本にもたらされたかということを文献的に確かめることができないのは残念ですが、9世紀の始めに入唐した空海は、『王昌齡集』一卷、『朱昼詩』一卷、『朱千乗詩』一卷、『王智章詩』一卷、などを将来しています（『性靈集』巻第四「獻雜文表」）。これらはすべて8世紀の盛唐期の詩人たちですが、遣唐使に随行した留学生が大量の図書を日本にもたらしたのは確かですから、空海の場合のように、そのなかに詩集も含まれていたと考えてよいでしょう。

文化使節団的性格を明確に持った最初の遣唐使が派遣されるのは、701年、大宝元年のことです。これ以後、怒濤のように長安文化は具体的なモノの形をとって日本に流れ込みますが、それ以前にも戦争後の人物往来（捕虜交換はその一つ）があったことは先に話したとおりです。人が動けば、それとともにモノも情報も動きます。唐の新しい文化のおおよそのことは、大宝の遣唐使以前にも、日本人

に知られていたことは間違いないでしょう。

要するに、唐の「近体詩」の隆盛が個人詩集の形で日本に将来されたことが、今私が考えている「万葉時代」の日本のウタを革新し、ウタが作家の固有名と不可欠の関係を結び、個人歌集の編集が行なわれるようになった、一つの大きな要因ではなかったか。そのことを指摘しておきたいのです。

先ほど「近体詩」の隆盛、ということを申し上げました。「近体詩」とは一体何でしょうか？ 簡単に言えば、「近体詩」とは、初唐以後の「律詩」と「絶句」と呼ばれる、厳密な韻律規則(平仄の規則)を持つ定型詩の総称であると定義できるでしょう。唐の人材登用制度は、隋の制度を継承して、科挙の本格的な採用という点でまことに革命的な転換を中国社会にもたらすのですが、とくに「進士」の科挙、つまり文学能力を問う試験がもっとも尊重され、人気も高かったということが、唐の「近体詩」流行の背景になっています。それが中国唐代の文学革新を生み出す原動力でした。

「近体詩」隆盛の牽引力となったのが科挙であったことは疑いを容れない事実ですが、これに合格した進士たちが、その技巧を競ったのが宮廷で皇帝から出される課題に応じて作られる詩、普通「応制詩」と呼ばれるものです。もっとも華やかな唐詩の場面は何であったかと言えば、この「応制詩」を描いて他にはないでしょう。この「応制詩」の流行は日本にも直輸入され、柿本人麻呂や笠金村などの宮廷歌人を生み出します。

科挙は家柄ではなく個人の能力による登用ですので、そこでは個人が評価されるわけで、従って詩も個人の名前と切り離すことができません。科挙と応制詩が唐詩の個人性を切り出す制度的機構でした。この長安のモダニズムがほぼそのままの形で新生天皇国家の「日本」（「日本」と言う国号は天武天皇以後の新しい天皇国家が採用したものでした）に取り入れられ、『万葉集』の宮廷歌となった、というわけです。日本でも歌人はその作歌能力によって評価されるようになったのです。

唐の科挙制度は、成功者としての「進士」を数多く生み出しますが、それと同時に「進士」予備軍、あるいは「進士」になれなかった失敗者たちも生み出します。その人たちもまた詩を書き、「進士」の応制詩よりもさらに個性的色彩の濃厚な詩を書きます。勿論、「進士」たちも宮廷の場を離れて個人的な場でも詩をたくさん作ったことでしょう。官人も官人候補者も詩を読む、その詩があれこれと批評の対象になり、優劣が競われるようになり、それがまた詩の隆盛をいやが上にも盛り上げると言うプラスの相乗運動が生じてきます。これが唐代に詩が流行し、個人詩集が流行する社会的背景です。

漢詩に限ってみれば、それは『懷風藻』という日本版漢詩集への影響ということになるのですが、唐詩の状況は、日本のウタの世界にも大きな影響を与えないではいませんでした。宮廷歌人の誕生と日本版「応制詩」の質の飛躍的向上、ひ

いては日本の定型詩の革新は、中国詩壇の刺激無しには考えられないことです。

これら万葉初期の宮廷歌人たちは、間接的にしか唐詩の状況を知ることができませんでした。彼らが中国にわたったということは知られていません。しかし、ここに一人、万葉歌人のなかで特別の位置を占める歌人がいます。その名は、山上憶良、と言います。憶良が万葉歌人のなかで特別の位置を占める理由は一つではありませんが、そのなかでも特に遣唐使との関係で言えば、憶良は数ある万葉歌人のなかで中国体験を有する唯一の歌人だということです。

その憶良を通じて、五音と七音の音律が、日本のウタのなかで初めて、詩の形として自覚され、詩が音の組織として自律性を持つものであり、詩は単なる心情の表白ではないという認識が生まれることになります。五音と七音は、言うまでもなく、日本のウタの基本的リズムですが、その自然発生的性格が反省的意識によって確認され、選択されるのです。

その話題に入る前に、憶良の入唐の経緯を確認しておきましょう。新生国家「日本」が唐に派遣した最初の使節団は、先にも述べましたように、大宝元年、701年の遣唐使でした。ふつう、「大宝の遣唐使」と呼ばれますので、ここでもその呼び名を使うことにします。私の言う「後期遣唐使」の最初のもので、この遣唐使は、万葉集にも「四つの船」と詠まれているように²、今までとは異なって四艘からなる船団で構成されていました。これは遣唐使の歴史では初めてのことであり、これ以後は、例外的な場合を除いて、遣唐使はすべて「四つの船」でした。その船団構成から言っても、派遣する側の「日本国」の意気込みがわかるのですが、使節団の構成においてもまったく画期的なものでした。

その大宝の遣唐使船に、一人の無位の下っ端役人が「遣唐少録」（記録担当の副官）として、乗っていました。それが山上憶良、という人物が歴史に登場するときの姿です。

この時の遣唐使を率いていたのは粟田真人で、大宝元年（701）に一度は出帆するのですが、暴風に会い、結局出発したのは翌年の大宝2年のことでした。その年十月無事長安に着いています。『旧唐書』³には、真人のことを「好く経史を読み、文を属するを解す。容止温雅なり」と書いています。この教養もあり、容姿も温雅な粟田真人によって、「日本」という新しい国家の誕生が唐の皇帝（当時は則天武后の周の時代でした）に報告されたのです。憶良は記録係りとして遣唐使に長安まで随行したと考えてよいでしょう。

大使粟田真人は慶雲元年（704）には帰国していますが、副使の巨勢邑治は慶雲4年（707）まで5年ほど在唐し、その年の3月に帰国報告を行っています。このときに、「白村江の戦」で捕虜となっていた「讃岐国那賀郡錦部刀良」たちも帰国しています。実に40数年に及ぶ長い虜囚の生活でしたが、その長い在唐生活で得たものも大きかったことでしょう⁴。憶良が帰国したのもこのときのことだと考えられています。その後、憶良は順調に出世し、和銅4年（716）従五位下の位階に

上り、伯耆守を経て、神亀3年(726)頃筑前守として九州に赴任、その翌々年に大宰府の帥(長官)として赴任してきた大伴旅人と知り合い、いわゆる「筑紫歌壇」の歌人として再び姿を現し、その後の足跡は知られませんが天平5年(733)以降に没したことが推定されています。

仏教に関する深い知識を有し、「貧窮問答歌」に見られるような社会の現状に対する批判的視線や人生の苦しみについての省察に富んだ思想詩人として知られている憶良ですが、彼にはもう一つ、「筑紫歌壇」の歌人という側面があることを忘れてはいけません。「筑紫歌壇」というのは、先に触れた大宰帥大伴旅人を中心にした実に革新的な歌人グループを指しています。大宰府の帥、大貳、少貳など大宰府の主要メンバーが加わったモダンな文学サロンでした。そこに筑前守山上憶良も加わっていたのです。

この「筑紫歌壇」の文学活動は『万葉集』巻五に収録されていますが、その作家活動には顕著な特徴が見られます。それは一つのテーマで歌を詠みあい、それをまとめて記録するという点と、漢字一つを日本語1音節に宛てる表記の一貫性です。それまでの『万葉集』の表記が、人麻呂のいわゆる「非略体」の表記に顕著に見られるように、主要な語には訓読みされる漢字(多くは熟語)を、補助的な助詞あるいは助動詞などには音読みされる漢字一字(または二字)を宛てるという方式を用いず、日本語表記としては煩雑ですらある、日本語1音節に漢字一字を当てる、いわゆる音節音訳方式を採用しているということです。

一つだけ例をあげておきますと、「梅花歌三十二首」のなかの憶良の歌(『万葉集』巻五、818)

春されば・まず咲く宿の・梅の花・独り見つつや・春日暮らさむ

という歌は、実際には次のように書かれています。

波流佐礼婆・麻豆佐久耶登能・烏梅能波奈・比等利美都々夜・波流比久良佐武

漢字音の通り読めば5・7・5・7・7の音節構成になりますし、眼で見てもその音節構成がはっきりと確認できます。「梅」などは一字でもよさそうなものを、日本語の二音節を有する発音通り「ウメ」と表記するために「烏梅」と二字で表記しています。

これは日本語表記の一つの新しい試みです。そして、後世の仮名へと繋がってゆく先駆的な試みです。しかし、日本語を漢字1字で1音節ごとに表記するというのは、先に言及した人麻呂の「非略体歌」の助詞表記などにも見られることです。ですから、日本語1音節を漢字1字で表記することは格別新しい試みというわけではありません。しかもそれは中国語自体において、例えば仏典のなかなど

で、また外国の固有名などの表記ではごく普通に使われていた方式です。

しかし、1 首の歌全部をこの音節音訳方式で表記するのは、それまでに例をみないことであり、ましてやその場で読まれた歌全部（「梅花歌三十二首」では 32 歌）に一貫してこの方式の表記を行うことはまったく思い切った、革新的なことと言わなければなりません。この方式は、「筑紫歌壇」に独自の表記であるといつてよいでしょう。『万葉集』のなかでは、例えば巻十四の東歌の「栢聞」歌などにもこの方式が採用されています。「筑紫歌壇」の方式が用いられているこれらの東歌は、そのことによって「筑紫歌壇」との関連がむしろ問題となるものです。

今日ここで私が問題にしたのは、このような表記の背後にある歌人たちの言語意識、そしてウタの音律に関する意識なのです。明らかにこの表記は、歌人たちがリズムの単位としての音節に意識的になっていることを示しています。おのずからなる無反省の伝統的なリズムでもなく、当然のこととして受け入れたリズムでもありません。意識的、反省的に捉えなおされたリズムがこの表記によって記録されていると考えなければなりません。

さらに、「筑紫歌壇」の作家活動は、多くがいわゆる「短歌」、それも「短歌」の集合体であり、それ以前の人麻呂や虫麻呂、赤人、金村たちの「長歌」と「短歌」（または「反歌」）を組み合わせたものではありません。音節への自覚とともに、ウタの定型性に対するこだわりのようなものが「筑紫歌壇」のウタには感じられます。このこだわりはやがて家持を経て、『古今集』以後の「和歌」へと繋がって行くものですが、この時点では、それはやはりおのずからそうなのだという定型性ではなく、意識的に捉えなおされた定型性であり、そこには歌人たちによってあらためて捉えなおされた 5・7・5・7・7 という音の形式への強い意思が感じられます。

これは私の印象に過ぎないと言われればそれまでのことです。そういう批判は甘んじて受けたいと思いますが、しかしこの「筑紫歌壇」の音節への認識と単一の定型性への意思は、やはり説明を求めている問題であると思います。なぜそうなのか、に対してやはり答える必要があると私は考えます。

それに対して、私は、それはともに中国詩壇（それは「近体詩」詩壇です）の、五言と七言の特権化に刺激を受けた「筑紫歌壇」の歌人たちの応答である、と答えるのです。周知のように、唐の「近体詩」は五言、七言の「律詩」と「絶句」をある意味で絶対化し、特権化し、聖化したのです。短い短詩形への異常なまでの自己限定を唐の「近体詩」はあえて選んだのです。限界に近い規則を詩に付与する事によって、言葉は異様な輝きと力を獲得するというのは何も唐代の「近体詩」に限りません。

私は 19 世紀フランス近代詩を専門的に研究する者ですが、そのフランス近代詩が「アレクサンドラン」と呼ばれる 12 音節からなる詩句に自己限定してゆく過程で、ボードレールやマラルメを頂点とする異様なまでの言語的美と表現の深さを

生み出し、それが全世界の近代詩に革新的な衝撃を与えたということを思い出してください。日本の近代詩はその形の擬態的追求の中で、新しい言語表現の可能性を開いてゆきました。

8世紀の「筑紫歌壇」に起きたことの、それは、近代における反復ではなかったかと私には思われるのです。つまり、「筑紫歌壇」の歌人たちは、五音・七音を漢字の五字・七字で表記する事によって、何とか日本独自の「近体詩」を作り出そうとしたのではないか、というのが私の考えです。定型短詩という規制、五音・七音という規制、それが「近体詩」であると彼等は、ある意味では正しく、ある意味では間違って認識し、それを日本語の上で実現しようとしたのではないのでしょうか？ この試みが、やがて旅人の息子である家持の洗練を経て、日本語による定型短詩形である「和歌」へと展開するというふうに、日本詩歌の辿った道筋を描くことができるのではないのでしょうか？

そのように考えると、私には、「筑紫歌壇」の一見すると遊戯的な文学活動のなかに、言語表現の、詩の、新しい可能性に果敢に挑戦する歌人の姿が見えるような気がします。表現の革新は、伝統の継承だけでできることではありません。新しい、眼に鮮やかな刺激、それは多くの場合、先進文化の光輝から発せられるものですが、その刺激なくしては不可能なことです。憶良はその刺激を中国の現場で身にしみこませて帰国したのではなかったのでしょうか？ 「筑紫歌壇」のその現場に憶良がいたということ、憶良の中国での見聞と、恐らくは彼自身の「近体詩」の試みがそこに生かされているということが、新たな解明すべき課題として浮上してくるように思われます。

憶良の新しい表現への意欲、革新への挑戦は、「遣唐使」によって新しい「東アジア世界」の中心に運ばれることで、憶良のなかに芽生えたのだと思います。今までは憶良の詩歌の内容にのみ、人々の目が注がれていたように思います。しかし、本当に困難であったのは、従って本当に注目すべきは、形の革新、リズムの革新であったでしょう。そこに、憶良の詩人としての本来の位置があったのだということを確認しておきたいと思います。

最後に結論めいたことを申し上げて私の話を終えることにします。旅人・憶良たちの「筑紫歌壇」の実験は、唐の「近体詩」に学び、それに拮抗しうる日本語定型短詩の創造を目指す試みであったのです。重要なことは、この試みを通じて、日本語のウタは、新しく生まれた東アジア世界に参加する資格を獲得し、そのことによって東アジア文学空間の創生の一翼を担ったのだということです。日本文学が初めて経験した国際化の試練、それが『万葉集』巻五の旅人や憶良の短歌のなかに、時には単調さを感じるあの反復のなかには、記録されているのだということです。

ご清聴ありがとうございました。

注釋

1. 本稿は、2004 年 10 月 18 日に、北京日本学研究中心で開催されたシンポジウム「万葉の時代と東アジアの交流」において行った口頭発表に多少の修正または補正を加えたものである。口頭発表を論文形式に書き改めることは、時間的余裕に恵まれず諦めざるをえなかった。それで、文字化するにあたって、可能な限り一貫した論旨が汲み取れるような修正乃至補正に留めて、当日の「パネル」での口調をそのままに残すことにした。読者の寛恕を請いたい。
(2005 年 7 月 5 日、東京にて記す)
2. 『万葉集』巻十九、4264 (長歌)、4265(短歌)を見よ。以下に短歌のみ引用しておく。「四つの船・はや還り来と・白香著け・わが裳の裾に・鎮ひて待たむ」
3. 『旧唐書』卷百九十九上「東夷伝」
4. 『続日本紀』卷二「文武天皇」条